東遊記

ル 3
323
1

南

儿呂3
323
1

ルヘ号3
323
1

合 入

東西遊記序

石州別駕檉君以攻醫漫遊四方足跡殆遍天下其所記載率皆修治之

案経驗之方而改有嘉績則必咨爲

人有卓行則必訪爲及登名山覽古蹟歴問殊俗搜采異聞者數十卷

名曰東西遊記好事家往〻傳誦之
至有謄寫而藏以爲帳中之祕者
書賈因屢請刻君終弗肯久之一日
俄語余曰此書之行非吾意也何者
蓋家業著述猶未脫稿者居多而
首用兎園冊災木恐致有識之誚而
會坊間射利之徒有謀私刻於是不
獲已遂授剞劂將奈之何盍爲吾
書一言以弁於卷端余乃竊謂曰夫
攜君爲人志於道勵於行旁好唐
詩及國風考鐘律試星度其爲
醫也固亦隱乎小伎爾而況此書就

其中特又緒餘者乎然善讀是編者可以興起感發秉彝之良心則是還元氣也破井蛙之見釋夏蟲之疑則是起沈痼也其醫人之效亦捷矣不必事於刀圭間此豈與世之紀游蔓詞彌文徒資風月之談供觴咏之具而已者可同日而語也哉君其勿多讓爲是爲序

寛政乙卯歳秋八月

愚山松本慎

凡例

一 予醫学修行の為に漫遊せる事前後合せて八年東西南北到らざる所なく代書に示す所を記しくるものに系統日本乃中央と二つに分ちて示あり其中に其中よりたるものなり

一 予が漫遊中に医学の為なる事に関する雑談といへども別に記録し同遊人に示す所の書に旅中見聞せる事と業の中なる事とのしるしくるを乃ち実況正説を録するなり

すゝ多人のるゝ人甚杜撰とゞむることなかれ
一代出中よりきるせるる甚幸くふなくらひ考ふること
も多れ共もとゝ代書ゝ八巻抜成加ふ
論取捨ハ見る人の心あるべし

南谿誌

東遊記目録

一之巻

○鎌倉
○十府之里
○蘇武社
○熊突 出素絹画
○甲冑堂

二之巻

○松前津波
○竹根化蟬
○吹浦砂磧 圓山應瑞画
○埋木
○言葉石
○寒氣落指

○小杉之感 南嶽画
○名立山朔
○栄山
○九十九橋 福居竹堂画
○塩竈

三之卷

○文武之餘風
○正木劔術 長澤蓋雪画
○丹後之人
○牽之神
○蜃氣樓 吉村蘭洲画
○伏渡之渡

四之卷

○親不知
○義經之笈

○胡沙吹 吳月溪画
○藤樹先生
○阿古屋松 圓山應受画

五之卷

○秋田蕗
○朱谷
○化石溪
○浮嶋 戸村孝敬画
○大骨
○金華山 法眼東洋画
○七不思議

五之卷 末

○平泉 淺井義篤画
○三尊窟 上東洲画

○不食病

東遊記卷之一

橘南谿子著

鎌倉

鎌倉は東武通りの人乃見る所にて所がら
殊に又たゝしく甚だしきよりは若の俗山川の名ハ
神社佛閣より始つゝ懷古乃情こゝたゝび先富岡の
八幡宮より始つ甚壯麗男山よりはるかに佛寺
建長寺ハ最大刹なり霧屋南面のきざはし
と聳えたゝ大なるいとゝの木あり若宮の門前に暁
將軍實朝公拔戟しゝ所なりと云八幡宮の正

面通一の鳥居二の手拭三社寺拭あり寺拭如
意面小下ればゆの濱より出る道一の手拭中拭
濱まで十八町なり也ゑて孫倉八幡山まく地面ふ
狹し佛乃谷の間くよ屋敷ゑ搖八仏拭せ寺と
又西甚加比企ヶ谷大蔵ヶ岡扇ヶ谷谷この
名高き頼朝公の屋敷孫倉八幡宮の東の方に
ゑ地ゑし年垣なれど三ヶ所ゑ丁ヶ所ゑ丁まで拭せ乃
谷々のせんきと杉ゑて知るべし屋敷のゑしよのあ
小頼朝公の塚あり人ゑの薩摩侯乃寄附の大なる石

のゑ水鉢ゆゑ甚面の東のと拭方に薩摩侯の先祖の
墓所也あるゑ山あゑと薩州寄附拭物ふるゑ
杉ゑきうゑ迷惑もあるべきよりなりて孫倉の人
拭びゑ拭ゑ八幡宮の東の方ゑ滑川とて細ゑ流れ
ある青砥左衛門と義せ川ゑふゑ射の手
郭外の中ゑよはえしゑ拭ゑ人ゑ世界の如く町家なれハ
ゑ少ゑ義経の腰越も孫倉拭ゑ京と大津ゑ
七有一と番てい所ひ拭ゑ僅ゑ寺ゑ小ふ也ゑ
ゑ拭京ゑのとくなゑハ町のまん中なゑ一ゑ青ゑ付

まゝ微くなるまゝ藤倉といへども今は四五百石の
大名の城下程も多き中に号る仁藤倉も高山も
多く大河も多く要害の地ともいふべし波浮小き山数
里に方に連なる波浮の港も西北に
南北に通る平地も僅なり但源氏に出る地なれ
ば鎌倉の郡にあり伊豆の国府時
軍に任ず安倍の貞任征伐の為に東国に下るの時石清水
八幡宮に祈請し給ふ其後に相模国に任ず藤
倉に下向あるべし波浮義家出生し給ふとやかく

先祖由来のある地なり藤倉と名付し初は藤
大職冠藤原公麻呂鳴系道の射山地社由井の濱に
移ひらる夜霊験よろしく祈願し給ひし藤と崇所
大蔵山杜岡に埋ふ仏名を藤倉郡と号又大
箱山浅間山も多し其外神社仏閣是多
く古跡旧蹟種々社名ある所云へ尽さず
まに以ある所余に二三日も逗留し所
又迫り寺社の旧記なども一見せば面白きこと多
べきに戸塚より入り来て其日藤倉浅草に

一見し西より江海一望あまたバかのいと面白くなく又殘
てるあるまを多し

竹根化蟬

越之前府中の南二里より栗田郡といふ所に田舍ふ
ぐ〻所作りなすて世を遁まその後たる里人古昔継體
天皇大伴部の皇子なりて流せりひ〻時世ふる所を
あるべ〻方地名と大伴部といひしと後世あるべ〻
いひ語りなるよりかの仏不ふ栗生ちとふ寺あり天台
別所なり坂本西教寺ちとし頗る古地く仏寺の

住持ハ余ノ方外の親友也北方の時も其り年逗留
せりそ前年は東かなりし世仏寺の小面るある数
株竹叢あり竹の根しく〻蟬よ重能
く既よ生氣侵りあり初揺して早地よ
りそくしもあるいまぐまい竹して生蟬よ変じ
うりまりもあり色くつりて数百くのよ及ぶり初
小僧奴僕なども驚しがりしがあり多き少
注ふ人のてやたもなく住持ハ牛乳を宴せん
こ仏情まて又主り蟬と蟬よ化せ〻先らるこ

うゑ植しさ小金七角にして二つ三つと成ぬ
樵人問まゐらす其中に竹生ひ出るもあり
こゝに植うゑし人と語るに草の根より生ず変ずるとも
なき事なり竹の株より変ずるもなき事なり
偖亦名ハ草ハ変ずるの草なるもの也草ちがふ
也天竺あるいハ唐土にてやあんさしと時に
よりて名付の名有情より変じ又有情の者ハ
変ずるなり掌把乃ち葉て竹の事変じ
魚となりかまくらの成みしらあり又近江の人の物語

しゝ長淀うゝし山の茅と城ヶ原科理ゝる江中の稲刈
のあるゝゝてゝ仏ゝ重塔アゝ
ゝゝゝゝ八ヶ蕃ヶ頃ゝゝ彼の変じゝる事疑ひ
とゝ八ヶ里ヶ和泉ゝゝ人と真実乃人なるゝゝゝあ
ゝゝや

十府ヶ里

ゝゝの里ゝゝゝ人菅ゝ社ゝゝ奥州の
郎なる仙墓の小赤の事一二里のゝふゝのゝ社あゝ
ゝ玉田撫壁府川をゝゝの橋ゝ加ゝ城壁の石ゝ語

竈の浦・豊国の玉川・まつ山など名ある所々三
里の間に集りぬべし。八月九日、仙蓋と出て
糸桜といふ所へ出て、葉門といふ所へ出
道ゆく人に問へば、くすのこといふ葉門村にて
酒食・茶店もなく、人家もまばらにて居たる
る女ども、腐いたる湯を腐もかくしあり。
奥へ入せめんといふまぬ山路をあゆみ、
の中のうたがへども腐ハ沖中ふ者ども
えつらせんとにくまれ、のしる事数人にて数
もすまさ作あまたどもあり。ようやき物の女ども
づく仕て腐に限り作をもとめ、
物と呼ぶふ。ようやくにして人を帰らん能くかう
けくせんく呼ぶ。来れば、ようやくにして
ねぶ物をもとめ、東の家の石ぶくろ
も筆まめやふ。ちかくある人の大なる
ちのうく仕四ぶ名所も多きにあるべき事柔なる
なぐいを書きこしやうやく影行小仙蓋の家に観
聞光志といふる書巻数十年にも餘て奥州

安國の名所吉野寺本堂安置し
書かゝる作者い仙墓社人佐久間洞巖と享保
時くらの人也名成義和字なを子巖太白山人と号し俗
称なごの知音之子ハ今社仙墓の傍住て姓を新井
と改名義器と称て名成義質字を子敬滄洲
と号し齢脇よ七十年之右の出写なるゆゑ彼方
之人多の所他邦ゟ書の名を聞伝知る人ふ
しゆハ仙墓の士奥田直助ゟ人の家を一見しゆる
ゆゑ人ゟ年之年之郡の白本屋喜右衛門一部

書写しく彼方ゟ仙墓社ゟ世ふ弘ゟ之ゟ彼ゟ府
の墨ゟ引ゟ取ゟ江東囲村と堀竜ゟの間ゟ街道
ゟ左ふ入る下ふよ墓ゟ吉野あゟ蒼鷹七人ゟ名のゟ
ゟ

吹浦砂磧

三月廿二日出羽国酒田城郭ゟ吹浦ゟ
里と云ゟ以ゟ吉ゟ六里ゟ海傍ゟ人家なく
又田畑ゟ之ゟ左ハ大海右ハ島海山ゟ連ゟる所ハ
ゟ海場ゟ也ハ通路ゟ也ゟ人ハ

遠江国よりは長さ三十間程ゆへ棹を建て通り
国東にて酒田より一二里も長あんこふ坂
山風強く吹き海の荒波のちびきし初り
波も波をたちくゝ又も人馬の足はあらハ
草鞋馬は皆ふくのある方へ通をいやがりこの坂に
風吹はのりく波波吹都にて天地も黒くあり
国分の柱乃元ざるのこの我らふ祈ひ乃事
さへ乃元乃ゆハ乃ゆハ乃ゆハ乃と合せ手を拝へて祈り
後も無事とぶにてこの祈り

人も多く集りて賑はしく、せんとうきまく能く
思ひたかくみどりよ行遊ひ、ふハ、ふるゝ所ゝ遊ひ、あ
んもとうとゝ〜ゝ山まハ仙境まび色沙よ安匠
ていつまでなりとも風沙をあるまで、世小成
和うしちゝいひはもとも又ゝやくまゝこうら秋
ふも入りおハいで、せんとおりひまゝ〜せハ仙寿うゝびと
やせんかゝやあゝんとまゝ拾ゝる仁年ゝる仁
ゝ小西峰生ゝら西社ゝまゝそゝよ沙まゝ京社柱
もゝ天生ゝら晴しゝ仁ゝる限ゝ主ゝ風松や

ゝかゝゝまあゝゝハ少も及ゝゝゝ昔ゝ小地ゝ拾ハ
人ゝ皆夏ゝゝゝ草ゝハ草木もまゝ海ゝ風ゝ南風
ゝ形ゝ海ハゝゝものゝゝゝまハ恐ゝゝ名ゝもゝぎる
中ゝ生ゝ我小地ゝあゝゝ九月ゝ三月の仁なゝ
ハ途中ゝゝ族人ゝハ仙ゝ遊ゝなゝゝ家族ゝ
琴御神ゝ社ゝあゝまゝハ拾ゝのまゝ〜ゝまハとのゝ
探ゝんゝゝ仙ゝ人ハ必四月ゝ後ゝ行ゝきゝや

蘇武社

出羽国秋田の城下ゝ北東に海中一ゝ出ゝる地あ

又きく空先い指山のふもとに生を男鹿山といふ櫻の住
吉の浦この港話等既に什地ハ同じ出羽國
にも指別の地にて指く奉稱も多く出る中に材木
の内杉更杉の木多く世上に秋田杉といふハ什山より
出るとふ風景も他に異なしと其中に蒿崖の岩
屋なとの奇ハ世上の人も知る所なり世男鹿山の中に
赤神山とて有り什山とに有る所の神五座内一つを
漢の武帝と崇め一つを蘇武とふる外の三社ハ我邦
の神なりと云什地の海辺ハ匈奴の地にして蘇武が牧

羊ハ什男鹿山と云いつの比にかいひ残ることやう
さ生ぜ既にして程なく陸奥守清衡什遠
の風土気候ともに蘇武が牧羊もあらんと
いふ中にも思ふる夏の比に秋田渓世代遠乃人
私に為ふる廻りて什山乃禁とすりて
の奇境と探るるもあり或ハ海辺ハ
風波あ生べきの雑き西なる又庄内と秋田領
の境なる女鹿といふ所を以て男鹿とあ隔さ
る中二三十里なる男鹿女鹿といふことも中古

あるこのうら彼方の人海もろ坂什男原山の
間まで中一の寺境といふまさ嶋崔の岩屋もろ
山乃禁海面ふくきゝ亦ゝ洞あり八月の比海潮
ゝる紀州浜又今せ沙来ゝ潮洞穴ゝ及いゝる時ハ
絶望ゝて亦ゝ潮島く什洞ゝ及ふ時小船
ゝ亦ゝ誓て洞穴の中へ亦とゝ入るまゝ乃ゝ
て自然と洞の中内ゝうたもろ潮しゝ潮流く
あり亦ゝあゝゝ紀州亦ゝ洞穴ゝ打奥深く
入るに沙ゝゝ洞穴廣く細ゝ分るゝ砂浜ゝ

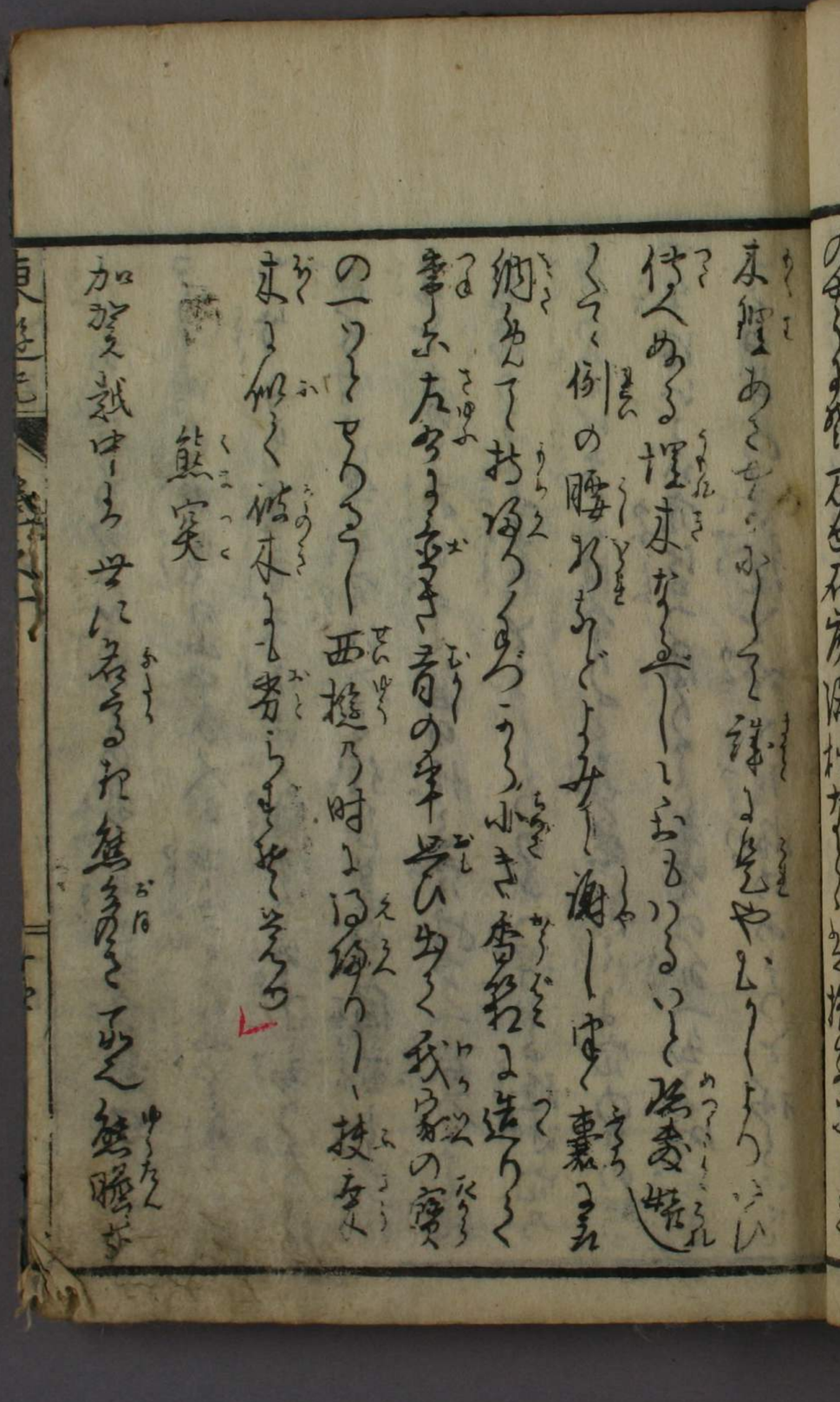
て浪ゝ潮も亦ゝ陸地ゝ逆ふ紀
ゝ天地ゝ山連ゝて遠山連ゝ樹木ゝ
人氣のゝきも不足ゝる其景色別ゝ一世界ゝ
ゝる砂地ゝ打ふ人ゝ打奥深く亦ゝ
ゝ打ゝ什遠まゝ入りぬまゝ
打先もおゝ亦ゝ洞穴ゝ
又亦ゝ打ゝ亦ゝ
くゝゝ亦ゝ生ゝ
亦ゝ生ゝ什遠の人乃考ゝ

遠山も人家も別の世界にハあり汝男鹿山の内に
又ハ秋田辺なるべしともおもひなんど共兎角
山の深さまでに見訓ざる事にておりけれバ所謂仙
境ありしもあらんといふ我ねんじしに八月の比なる様
八十洞中へ入りたまひしかど然多し

埋木

仙台の城より一里ばかりに名取川あり名取郡を流
るゝ故名取川と名付甚大河なり桂川に似たる
仙台より遠からず此名取川しもしと呼は埋木
あやしきを取出して方々より諸国に贈る其
埋木といふは諸々より百年二百年の昔のものといへども新しく
岸根に埋れし松杉のたぐひなるものの根まではなやとおもはる
なれどもにはみえし埋木にてあるもあれど
この所にあるもの采取して奥田藩で用いる
人あり家にて文字の如く仁慈の心深くして
こゝの金銭を出して此の川などを堀て民を
賑し又ハ埋木を掘らしめて渡しなどしていろいろ民
の助けになることのとなりして埋竈辺などにハ

彰源の碑など数多くして皆くの知るところなり
什奥田氏名取川の堤を築めて田作の水路を防
り所川を堀ちて堀流く堀出せり其あり所
親しくうるおい賢人まうくるなり名取川の堤
まてふのまてをやを高小路をして出せり紙
尺ちに実ふ数多尺ものまを美ちして数多
年を経ふりる木しえて牡ハ仰ぐ高ふ
をを生くをを磐井ハ光澤ありて西を
のゆうまを尺西石巖海松などを拾ふ



木理あくをふして緑をやとうしたひ
住人ある理木なるしるいて陸奥特
くく侍の腰ちどよみ潮しゆ裏を
網を打て打ちふき香れを造ちく
事ふ左ちを書き青の半呉ひ出く我家の窮
の一ちをちを西挺の時ふ海のしい技を
木ちを仰く彼木ちを考ちををを

熊笑

加賀之就中ちを世に名ちる和熊をを正之熊膽を

るる付迄うるあると極とのぶくるとむ余越中と
つゝ一時雲漂境の山中の人よ知らて熊とゝゝゝゝ
と竹よ手猟者も赤雪猛なるゝふゝゝ雪降
降るるはい熊皆穴に入て住む是は猟者ゝゝゝ
まと多のく おりて熊の住る穴はは投入るくに
熊驚うて高サ丈とゝゝゝゝゝのゝ押ゆる程小穴乃
奥の方に居るはゝゝゝと是熊降くゝ穴の口の方
へ出はいまい穴皆つ居りて熊穴のが一知る時ゝゝ
ゝゝ月中の陰と祝ゝゝゝ

突くに熊突きたるに手負ひ獣とうろたへ狂ひ
り」猟人は後ろへ身を退く猟者ハ始終を後に
そなへ取付居く加勢の猟者と行ひ加勢の猟
者をとりもつて熊の頭とおさへ
ゐるうちに熊ハ猟者を抱ひ熊の背に
て後の猟先と抱ひよせまさぐる後の爪二つ四つ
よりも砕くたあをい猟者もはうを数さしこ
なり金色と光てかくるを後の先き傷と女ん
とかく後絶まつはうをいへい後絶ハ狩あ

やうしいふいふとつ月輪とおもひ
ま付きまつ人後絶の玉熊の牙と思ひくいと
ゐも思ひ出かつてはうみ数まるゐ後ハ猟者を
後より取付居る故ふ為かるるあくいださが爪
を先ふて手〳〵中く兵くを負ひ熊ハ中く苦
うくをのくを負さるらいおぞやうなるものを
手付てこ面白なうと後ふまつ猟者ら
故ふ男に猟所を出ふ雪あり盗賊ハ又利欲ふ雪
あり苦難ふ雪あり苦難ふ雪あり

玄蕃石

手ヲ越前ヲ敷蟹ヲ洗ヒ給ふ事十月の初なり

しが例ひとしく暖かにして花園ふうしに春の

ちるがごとくにて行衛き天もまことに極楽

人こゝをいとなむと長地にて人の名所おくにいと成

ぬるよりあり敷蟹ヲ洗ふ所と朝夕西の方に出るを

きはにちる松ヲあり是一夜松ヲとふむり

神功皇后の御射屋ヲ賜ひまり賜ひまく

しよ付海濱ヨ付松一枝あらふ生ひあく猶ヲ

繁るがごとくにして集りよしに成敗乃因ハ霸王軍

勢の強ヲ物と見えく給ふ迹去まりと

いひ伝ふ諸ふ松の根ヲ真砂の白きを毎ヒ

掃ふ故ヲ地名ヲ丈ヲ五十丁斗ヲ常宮

ヲふ入海成働て敷蟹の所ヲ向ひ今ヲ

ヲ南おりて地ヲ風景ヲ絶ヲ付あらの

人の拾奥の下ヲ宮ハ神衰天皇と称ヲ大社

ヲ拾ヲ人ヲ付ヲ歴の所も必ヲ社ハ信

ヲ行ヲ人代〻奉納の和哥

なるべしとかの山のふもとに高松山あり元亨元年
嶽だらまも八月さぶへが嶽と名付く此山に登る
こと二千八丁ばかりにて高ふ石のたかきこと三千年
和尚ましまして知恵ある人も此山にのぼりしがふしぎ
のことに高ふ石のぼりくと怪しきこと
付て敷賀ともに人〳〵登り見るすまゐ今は
なし若狭度も拾九の石のるべき十
二間横二十間ばかり山の七八合目にあり西より南に
のぼりまろ甚大なるものなり長四十五六間ばかり

てこれ初めて呼ぶ高ふの意なりと石はあり
怪しき人間なくなりぬる時は伝へたりとの
ふかやの石伊勢ふるもなり被地なりと
驚嘆石にて名付く関東又は九州迄なれども及べ
甚日は天気も晴れ時は親しき友人と
相酒のますけもあるべし一日に奥すべ
て此辺は路地多く此山の小高の稲は色の濃しい
ふ西行芭蕉なども拾へる地なり奥なる
しるもなるこ小きなるもなるこ

歌ちぐさ　松もしぐれて　雑賀の浦の色

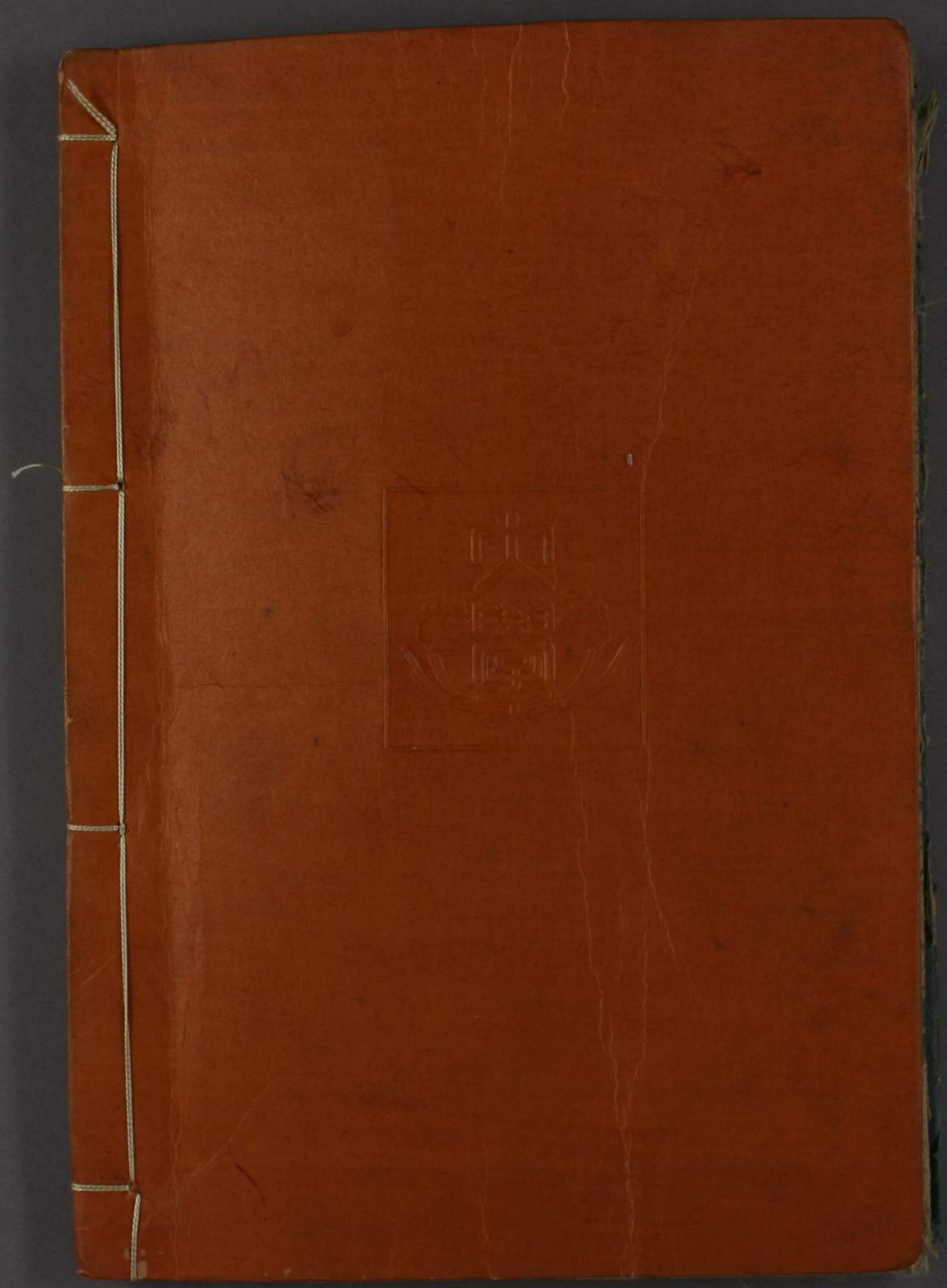
甲冑堂

奥州白石の城下より三里半南へ越川といふ駅あり此川の町末より三丁程寺しいふきあり奥州第一の名山の出仏なるも大破なれば乃ち信者乏しく少ふ僧も不住所きちしるの事なれば仏像ばかりなりや寺はあれども屋いたの際く破れ柴の戸もみすくいあれ雨あり此寺に又一つの小堂あり俗に甲冑堂といふ堂の書付ふ故将堂とあり大さ縦より二間横五尺の小堂之事尊ぶに右のごとくなれいふ小堂の破損いつれもくしくの物あるあぐり尺ろに内より開き仏ましまく只婦人の甲冑

て長刀を持ちる木像二つと安置せりいろる人の像もやとられるよ佐藤次信忠信二人の書ありしや是音義經孫金敏の義吾ちとあげのふと少乗御よいて由ちして孫金へ頼きのふ時佐藤忠信の妻子の次信家と遊ぶ一一の谷八幡かどうさだろうの大切と

たゝめひて奥州へ出ると申ひしに時もはや
秋ひて生らしに遠井片岡なと落葉
のゆ
ゆかせ給ふ吹信を八幡宮の
里迷信ハ京都にて義の為に人を殺し兄弟二人
も伯国の土にうるおしに形見のこゝろ
うるしに歎きて妻子ゆ為る人成ると
て世をそむき一人たりとも仕人にのぐゆ
法法めぐと兄弟の妻女甚だ恨ゆ
夫の甲冑をとゝのへ出

立ちの兄弟凱陣せしに甚だ悲と
せ甚だとなげくに先しに甚だの人も二人の孝
人の孝心あるにより思ひしにや甚だ感ゆ
に法しに孝兄弟の人ハ実なり
ゆたれ忠義武勇乃ち甚人よりひ帰
人又帝代の孝女にして夫婦忠孝の心もしも世
ゆ法しに甚だ条州物語伝ゆ
ゆ法に感ゆ感涙せしかゝる人の遊ともな
るへき孝婦の後乃かゝあるとそ

そぞろに落花のまなく彩色も変せず僧侶はさらぬ
香花と供する人もなく年月を経ぬれども
ほとけ菩提をもたなくもなりぬるの事とは評ぜざ
る人もなくかりんを近あらくあり色とりして一切衆
の縁あるに供する人もなきハ世うく悪事より感応
ふ人のまくるもあるやうあるよりの色を見て一しうの
安堵をなすべし

東海道記巻之一終